

タイトル **やましろ発見伝**

掲載日 2011年11月2日(水)

掲載紙誌名 朝日新聞

掲載面 24面



大学進学を機に京都に来て50年余り。宇治市に住み始めて約40年。断層がある地域を、全国くまなく歩いてきた地震学者は、奈良から京都にかけての地形や断層帯も知り尽くしている。

宇治は、茶どころというので気に入っています。山あり谷ありで風光明媚。こうしたところでは、活断層が盆地や平野を造ってきました。山ばかりのところには活断層がないわけで、人が好んで住み着くようなところは、そもそも活断層帯にあるのです。

私が住んでいるから宇治は安全なのでは、と言う人がいますが、わが家も黄驛断層(宇治市)のすぐ近くにあり、ます。住んだ時には活断層の

国際高等研究所所長 **尾池和夫さん** (71)



おいけ・かずお 1940年東京生まれ、高知で育つ。63年京都大学地球物理学科卒。理学研究科長などを経て、2003年、08年に総長、福島第一原発事故調査・検証委員会委員。著書に「日本列島の巨大地震」(岩波書店)、「地震を知って震災に備える」(京阪奈地域を中心として)(国際高等研究所)など。俳句が趣味で、氷室俳句会では副主宰。

「存在はわかっていますんでしたが……」

調査の際にはメモ用紙かノートを持ち歩く。景色を見つめ、をまつる神社が京田辺市にある。

「こま」に幸あり

②

活断層帯 実は豊かな土地

り、ウリが栽培されたことを伝える石碑「瓜生田の遺跡」が精華町にあると紹介した。

岩盤が断層で上下に動く、隆起した山地が浸食されて扇状地を作り、沈んだ土地に土が堆積し、水を蓄えます。堆積層が厚くなった盆地は、いい地下水がある豊かな土地になるのです。

奈良盆地の断層帯から北へ続く井手断層(木津川市)宇治市)もそうした場所。この地域には、朝鮮に由来する「狛」という地名が多いし、高麗寺跡もある。豊かな土地だからこそ、朝鮮から来た人が住み着いてコマを作り、酒を造り、ウリの奈良漬を日本に伝えてくれたのでしょう。

2009年、先進的な分野での基礎研究を目指して学研都市に設立された財団法人国際高等

研究所(木津川市)の所長に就任した。研究所周辺の景色を眺めるのが好きで、研究所から近鉄新祝園駅までの約4kmの道をよく歩く。

生駒山系の東斜面が京阪奈丘陵ですが、もともと荒地で誰も住めなかった。そこに学研都市ができ、今は知の最先端となりました。交通の便がよく、人口もまだ増えている。これもまた、近くに歴史のある豊かな土地があるからでしょう。

木津川の周辺には歴史を感じさせる遺跡が多い。平安京は長く続いた都ですが、恭仁京も平城京もそこに至る道筋なんです。地元の自治体は、生まれた文化をもっと宣伝してほしいですね。今は野山を歩く人も多いため、関心を集めるはず。地形を見ながら、この地域の歴史や文化を楽しんでほしい。きっと何か新しい発見がありますよ。

(聞き手・横川修 写真・高橋一徳)